

## 内反足

座長：薩 摩 真 一・日下部 浩

このパネルディスカッションでは、6 題の発表と討論が行われた。

千葉大学の見目智紀先生は、先天性内反足患児と同年齢健常児との運動能力調査における比較検討について発表された。先天性内反足患児の学童期運動能力は臨床的評価が良好であれば保存療法、手術療法によらず健常児に劣ることはないこと、矯正不良例や放置例に対しては必要に応じて矯正手術を行うべきと報告された。

神奈川県立こども医療センターの町田治郎先生は、距踵関節を解離しない後内側解離術後 15 歳以上まで経過観察した内反足症例の X 線所見について報告された。その結果、中等度以上の距骨扁平化は、早期手術群で 67%、後期手術群で 26% にみられたが、重度例は早期手術としてエバンス変法を要した 1 例のみであり、同術式が距骨扁平化や足根骨癒合を最小限にできることを報告された。

仙台赤十字病院の入江太一先生は、Ponseti 法で治療され 3 歳以上まで経過観察された内反足症例について X 線写真上の足根骨アライメントを検討された。その結果、足根骨アライメントは前足部の内転、後足部内反、凹足の改善は良好で、軽度尖足、足関節やショパール関節での内転が残存する例がみられたこと、臨床経過としては再手術を要した例はなく良好な結果であったと報告された。

静岡県立こども病院の岡田慶太先生は、Ponseti 法を用いて治療し 1 年以上経過した先天性内反足の変形再発の関連因子について調査され、Ponseti 法では良好な成績が得られているが変形再発は約 30% であり、適切な装具使用が必須であると報告された。

大阪府立母子保健総合医療センターの田村太資先生は、Ponseti 法による初期治療例で、歩行開始後の変形再発例について調査し、変形再発例の多くは装具療法不適応症例であることと、前脛骨筋移行術が歩容改善に有効であることを報告された。

あいち小児保健医療総合センターの北小路隆彦先生は、Ponseti 法導入前後の短期成績を比較され、Ponseti 法では治療開始が遅れた場合にも治療効果が落ちにくいことが判明したことを報告された。

距踵関節を解離しない後内側解離術後症例での距骨扁平化や足根骨癒合を最小限にできること、Ponseti 法による良好な治療成績などが報告され、適切な保存療法、低侵襲な手術療法により内反足治療成績が向上すること、臨床評価が良好であれば患者の運動能力の向上にも寄与することが確認された。

また、本邦では近年 Ponseti 法導入施設が増加しているが、再発例に対する評価が行われるようになり、本邦でも米国と同様に高再発率の調査報告も散見されるようになってきている。Ponseti 法は矯正のメカニズム等は理解しやすく、その点では導入しやすい一方で、実際にはギプス矯正手技や扱い方などにいくつかの注意すべき点が存在するため、手技、取り扱い法に関してより正確性が求められることが議論された。

(文責：日下部 浩)